

## 「すばらしき母親の物語」から

令和6年度の校長室だより第30号で、文筆家の有吉忠行さんの話を紹介しました。改めて有吉さんの「すばらしき母親の物語」を手に入れ、読んでいます。著書の最初の話として、都心の混雑する駅での乗車時の親子の様子です。

東京の新宿駅、郊外へ向かう私鉄でのことです。少し人の混み始めた夕刻5時前、折り返しの始発電車を各3列の整列乗車で待っているところへ電車が入ってきました。前から4番目に並んでいた私は、いつものとおり電車が止まる前から、もう後ろから押され気味です。そして、ドアが開いて最前列の人が乗車し始めたと思うと、私のすぐ後ろに母親と一緒に並んでいた男の子が、列を乱して車内に駆け込みました。私は、この順番であれば十分に掛けられると思っていました。ところが乗り込んでみると、もう満席です。ふと見ると、男の子もドアの近くに席をとっています。そして、やがて姿を見せた母親へ声をかけました。

「お母さん、ここ、ここ、お母さん」

男の子は母親のために席をとっていたのです。母親がそばに来るのを待って、自分は席を立ちました。ところがまったく思いがけない母親の姿を見ることになりました。母親は男の子の声に応じないまま、すぐ横に立っておられた初老の女性へ、静かに……。 「どうぞお掛けくださいませ、どうぞ」男の子は、ふに落ちない。げげんな顔です。



やがて母親は、男の子へ声を抑えて、それでもはっきり言いました。「あなたは、皆さんが並んで電車を待っておられたのに。順番を乱して乗り込んで、この席をとったでしょ。私のためにという気持ちはよく分かるわ。でも、ね。順番を乱して乗ったのは、してはいけないことをしたの。してはいけないことをして、この席をとったの。だから私は、その席に座ってはいけないの。もちろんあなただって、座る権利はないの。私の言っていること、あなたなら分かるでしょ」それは、厳しくとがめるような重いものではなく、ごく普通の心優しい語りかけでした。「はい、分かった。もうしない」男の子は、二度小さくうなずきました。

初老の女性が母親に言いました。「お母さん、よくお分かりになったのですから、今日は掛けてあげてください」しかし、母親は丁寧に言葉を返しました。「ありがとうございます。でも、私が掛けますと、結果的には、この子のしたことを認めてしまうことになってしまいます。この子のためにも、お掛けくださいませんか」初老の女性は男の子に「ごめんなさいね」と声を掛けて席に腰を下ろしました。

やがて発車。母親の右手は電車の揺れから守ってやるように男の子の肩にかけられ、母親に耳元で何か面白いことでもささやかれたのか、男の子は笑顔になって母親を見上げていました。

昨年度、この話は『叱る』と『怒る』というテーマで紹介しました。

どちらも相手の非をとがめ、注意を与えるときに用いる言葉です。「叱る」と「怒る」の意味は、「怒る」には、その根底に「腹を立てている」という心の状態がありそうです。一方の「叱る」は、腹を立てているわけではないと言えます。教育的な配慮をもって冷静に「叱る」のか、それともただカッとなって感情的に「怒る」のか。その差は、相手の受け止め方にも違いを生むことになるかもしれません。

相手が小さな子どもだったとしても、自分や他人を傷つける行為については、子ども本人を守るためにしっかりと叱る必要があるはずです。また、公共の場で騒いだり、うそをついたりというように、社会のルールや道徳に反する行為についても同様だと思います。難しいのはその際の叱り方です。感情的に怒ってしまえば、子どもの心を傷つけ、かえって反発を生む結果になりかねません。この話は、子どもにも親にも納得がいて、よい結果をもたらさせる「プラスになる叱り方」の一つの好例と言えらると思います。

好ましい叱り方とは、叱られた本人が過ちを認めて「よし、これからは改めよう」と思うものでなければならないでしょう。叱られることを快く思う子どもはいないでしょうが、たとえ一時は反発心が湧き起こったとしても、その激情が過ぎ去った後に「自分は確かに愛され、信頼されている」と実感できたなら、その叱責は子どもの心に届き、成長の糧になっていくのかもしれないという内容でした。



### 有吉さんの著書から

彼はこの親子の様子を「自主・自律」という別の視点で紹介しています。

「しなければならないこと」「してはならないこと」などを正しく判断し、正しく行動する「自律」の大切さを、どれほど教えられているだろうか。一人一人は、正しく生きていく心を、少しずつでも自分で育てているだろうか。

自分の意志で主体的に考えながら歩み、壁にぶつかれば自らたたかかって乗り越え、夢も希望も、自立も自律も、他への思いやりも見ずから学び続ける心も、たとえ満点でなくてもよいから自分で自分のものにしていってこそ、その人の生き方は、楽しさとやりがいにあふれた、真に幸せなものになる。

人として「してもよいこと」「しなければならないこと」「してはならないこと」。過去40年間、「心」より「物」の時代に生きてきた日本人の多くは、この「人として」のことが、もう、わからなくなってしまうのであろうか。ともかく、大人も子どもも「人として」のことをわかってもらわなければ困る。そのための第一のこととして、私はちゅうちょなく「自分の立てた規範に従って行動する『自制心』」をあげる。

この親子の話には、自律への原点となるものを、すっきりと教えられた。おそらく、この母親は、男の子に「してはいけない」ことを教えようとする以前に、母親自身の心に培われていた自律の思いを、そのまま言葉にして、子の心に届けられたのであろう。口先だけの言い聞かせでなく、母親の信念となっているものをもって、子どもの心を、より正しいものへと、より深いものへ変えていく。子どもの育て方に、これにまさるものはない。

愛情を秘めた理路整然とした優しい言葉で語りかけ、最後を「あなたなら分かるでしょ」の一言で結ばれたものの中には、まぎれもなく、子への深い信頼があった。そして男の子は、その母親の信頼を受け止めたことで「はい、分かった。もうしない」という言葉を母に返したのではなかろうか。

親子が電車へ駆け込み、人への思いやりの心など、ひとかけらもなく席をとった姿。もう、これは、どれほど多く目にしてきたかもしれない。その度に私は、親の心を悲しむ以上に、「してはいけないこと」自律の心を教えられないままに育てられていく子にこそ、同情の思いを寄せたものである。

私たち教師も保護者の皆様も、子どもにこの「人として」を教えなければならない場面が必ずあります。その時にどう教えたらいいか、考えるべき内容であると思います。決して簡単なことではありません。しかし、一方的に言い聞かせるのではなく、このような思いを感じながら、子どもと接することがとても大切であると思います。

(引用：有吉忠行著『すばらしき母親の物語—母と子の感動 42 編』(モラロジー—道徳教育財団発刊)